

○壇二 村の二町三十間余丑寅の方にあり。西を灰塚と称す。高六尺、周二十間余、一は其東三十間余、石原村と入会の地にあり。糠塚と称す。高九尺、周三十間余、東西に相對して田畝の中にあり。土民其来由を伝えず。天明中（一七八一―一七八八）灰塚より管の如なる青石数枚と破鏡一片を掘出す。青石は美須麻流の珠なるべしと云。

二〇、館 村

1、清水と館 田村山の景勝清水、産清水はあわさつて祖母川、或は姥川となり、館の東で古川とあわさり、館村を半円状にとりまく大湿原をなすに至る。現在も葦谷地が繁つて、田村山と館村の間の道路まで、昔は湿地をなしていた。その湿地を開田したものはひどろ田といい「館のひどろ田のからばのかれ、またがなければ首までも」とうたわれていたほどである。この東北を姥川・古川の大湿原でとりまき、西辺に堀を設けて、要害の地として、古く館があつたらしい。

寛文五年の書上げには、この館の形態をやや詳しく述べて、館の形は鱗のかたちをなし、周りに堀を廻らしておよそ二町五二間、民家がある中であつたという。しかしその築いた人や時代はわかっていない。現在も村北に館の下という字があり、現在も田の真中に畑になって残っている。その周囲附近一帯がひどろ田で、昔の堀の跡であつたと伝えている。それに対して村が館の内である。観音堂は天正十六年（一五八八）の兵火のため災上、（注、伊達政宗の来攻は翌十七年で、そのことをいうのか）再興したとあるから、下荒井の富田の城、石原の館跡伝承などと較べてみて、葦名時代の豪族の館かとも思われる。現在ある最も古い家は十七代になるといふ坂内宝宅で、長野からの来住と伝えている。正保三年保科公、諏訪大神を勧請した時の神職であつたというが、古い館主との関係はわからない。